には、短かい春はもう夏に入る。

「夏」

急に村は騒々しくなる。カヌーを屋根につんだ自動車が往来し、今まで堅く閉ざされていたあちこちの別荘の窓は開かれ、庭で食事をする姿がみられだす。あちこちの森に天幕が張られ、湖畔には華麗な水着姿がみられる。モントリオールの子供達のための林間学校や音楽教室がひらかれ、木の間から歌声が流れる。

老人達も、終日庭の寝椅子に裸身で日光浴を楽しむ。しかし一旦木蔭に入ると、何か身にまとうものがほしくなるほど涼しい。日本の夏の蒸し暑さと違い、湿気のない空気は涼しい。

私達は八月の終り、一年にわたるセンコンの生活を切りあげ、モントリオールの山手のアパートへ移ってきた。娘夫婦の仕事の関係もあり、孫は新しく都会の学校へ転校することになった。一年間の交友だったが、お別れの会で涙を浮かべている子もあったという。

今度は大きな二つの教会にはさまれた立派な学校である。鐘のなるのが聞こえるほど家に近い。はじめ孫娘との別れの悲しさに、カナダへ来てしまったが、孫の方はもう問題はなくなった。幸い、昨今身体の調子も悪くないので、少し腰をすえて、カナダのことを調べたいと思っている。

なんと言っても広大な国土である。悠揚迫らざるこの国の人達のスケールの大きさを思うと、狭い国土にひしめき合いながら、狂気のように日夜馳けずり回っている日本の不幸に涙さえ催す。教育熱り。文化の一端としての放送文化しかり。商業主義に毒され、小間切れ文化になっている悲惨な現状には、眼をおおいたくなるものがある。

その意味で、日本とカナダは全く対照的な国柄だけに、幸い両国間の五十年の修交の間にも、さしたる障害をみなかっただけ、更に一層親交を深め、カナダの文化の本質に触れ、大いに反省に資する相手国としては、最適であろうと思う。

もちろん、この国にも種々困難な問題はあるようであるが、国土の広大さ、各種資源の豊富さ、又悠揚迫らざる国民の鷹揚さ、スケールの大きさ等を思うと、きたる二十一世紀は、カナダの世紀になるのではなかろうかという気がする。

なにはともあれ、
美し国、なれが頭は美しき華に飾られ
……のカナダ国歌の歌詞通りの栄光を、
私は信じたい。

〈佳作〉

今後の日加貿易関係

坂本信雄（千葉県松戸市　公務員）

国家間の経済関係は、貿易、資本、技術等の交流を通じて展開される。日加間の経済関係は、その交流が始まったときから貿易が中心であり、今後、資本、技術等の面でも交流が盛んになることが予想されるものの、貿易が両国の経済関係の中心であることに変わりないであろう。

日加間の貿易は、これまでカナダが日本に原材料等を輸出し、日本がカナダに製品輸出をするという貿易パターンであるが、これは資源輸出のみならず、製品輸出の拡大をめざしているカナダの貿易路線と必ずしもかみあわなくなってきた。また、食料品や原材料にしても、両国間の貿易を一層拡大する余地があるように思われる。

日加間の長期的な貿易関係はどのようにあるべきか考えてみよう。

一、日本は食料品の輸入依存度を高めよ

日本の食料品輸入額は、一九七五年の八十八億ドルから七八年には百十四億ドルへ増加した。この間に、カナダの対日食料品輸出額は六・五億ドルから七・九億ドルへと増加したが、日本の食料品輸入に占めるシェアは、七五年よりやや後退して七パーセント弱（六・九パーセント）である。カナダの対日輸出で最大の品目は、小麦に代わって菜種であり、最近では数の子、鮭などの魚貝類の対日輸出の増加が目覚しい。

日本の食料品の全体の輸入額は、先進諸国のなかで西ドイツ、アメリカについで大きく、穀物、大豆等の主要農産品では世界最大の輸入国となっている。これを国内自給率との関係でみると、野菜（生鮮）、卵類でほぼ完全自給を達成しているが、飼料用穀物である麦類、豆類等では、すう勢的にも自給率が低下している。また肉類、果実、牛乳、乳製品ではアメリカ、EC諸国の自給率を総じて下回っている。

こうした自給率の動向と所得水準の向上を反映した食生活の高度化、多様化を考慮すると、日本の食料品輸入の余地はまだまだ大きいとみるべきだろう。では、どの程度輸入依存度を引き上げることが可能だろうか。七五年の国内生産＋輸入の合計に対する輸入分の比率＝輸入依存度は二三・四パーセントであるが、これを仮に三〇パーセントにするには、輸入額が三兆三千四百九十一億円でなければならない。七五年の実際の輸入額二兆六千百六十三億円に比べて二八パーセントの増加となる。数量ベースでこの伸びを続けていることは、国内生産を一定に止めさえすれば輸入依存度三〇パーセント程度の達成はそれほど困難でないことを意味しよう。輸入依存度の上昇は、カナダの農水産物の対日輸出の増加をもたら